

手縫いにおける縫い目の機能的、外観的評価

相模女大家政 永井房子、○田中百子

聖徳大 三石幸夫

目的 縫い目形成の一つである手縫いにおける並縫いは、布を縫合するところに広く用いられる技法であり、一般には綿織物には4 mm前後、絹織物は2～3 mmの針目の大きさを縫うのがよいといわれている。これまで並縫いについては、針の持ち方や動作分析、縫合部の強度、縫い糸の疲労性等の研究報告があるが、針目の大きさの設定について、機能および外観より総合的に検討した研究はみられない。そこで演者らは、各種の布と糸を用い、針目の大きさを変化させて並縫いを行い、それらの縫い目について、特に針目の大きさに観点をあて、縫い目の機能的、外観的評価を試みた。機能的評価としては、機械的機能と縫製作業的機能における評価を行なった。

方法 試料布は綿織物2種、絹織物4種、計6種。試料糸は綿手縫い糸1種、絹手縫い糸2種、ポリエステル手縫い糸1種、計4種。針目の大きさは3.8 cm間に6、10、14、18目の4種。これらを組合わせて並縫いを行い、機械的機能は、ストリップ法により、試長10 cm、引っ張り速度100 mm/min、定歪によるくり返し伸長後の強度、およびくり返し伸長後の切断強度と切断伸度を測定。縫製作業的機能は、和服縫製専門家による30 cm間並縫い後の作業性を官能検査法により測定した。

結果 今回は機械的機能の結果を報告する。機械的機能ではくり返し伸長の回数が増すと強度は大きくなる傾向であり、これは試料布による差が大きい。さらに、いずれの試料布、試料糸においても、くり返し伸長後の切断強度、切断伸度は針目の小さい縫い目の方が大きい、縫い目近辺の織糸の損傷や座屈じわが大きい傾向がみられる。